



～ 第 7 回 生活者の環境危機意識調査 ～

“何十年に一度が毎年起きる” 連続する酷暑に危機感
7 年連続で「気候変動」が危機的な問題の第 1 位に

環境問題の解決予測に世代間で意識差
「環境問題は解決できる」高校生世代は大人世代の約 2 倍

公益財団法人旭硝子財団（理事長：島村琢哉、所在地：東京都千代田区）は、全国の 15～69 歳の男女 1,302 名（高校生世代：15～18 歳 211 名、Z 世代：18～24 歳※ 520 名、大人世代：25～69 歳 571 名）を対象に、環境問題への意識および行動について把握するため「第 7 回 生活者の環境危機意識調査」を実施しました。

本調査では、昨年から高校生世代を調査対象に加え、世代による環境問題への意識の違いについても調査しています。今回の調査では、環境問題に対する危機意識や SDGs の達成度、環境問題の解決に必要な要素などについて、世代によって異なる傾向がみられました。また、高校生世代の自由回答では、環境問題や社会課題について学校の授業で学んだ経験を挙げる回答もみられました。本調査は、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科蟹江憲史教授監修のもと、インターネットにて実施しました。主な調査結果は以下のとおりです。

- ◆国内の環境問題で危機的だと思う項目の 1 位は 7 年連続で「気候変動」。「何十年に一度といわれたものが、毎年起きている」「連続の酷暑は異常」など、各世代から異常気象を身近に感じる回答が寄せられた。
- ◆環境危機意識を時刻(0:01～12:00 の範囲)で表す環境危機時計は、昨年より約 30 分戻り「7 時 3 分」と「かなり不安」を示している。世代別では、高校生世代「7 時 1 分」、Z 世代「6 時 36 分」、大人世代「7 時 27 分」と大人世代の方が危機意識は高い。日本の有識者の回答「9 時 30 分」の「極めて不安」とは約 2 時間半の差はあるが、いずれも不安を感じている。
- ◆日本における現時点の感覚的な SDGs 達成度は、高校生世代 35.8%、Z 世代 34.9%、大人世代 31.3%と、若い世代ほど高く評価されている。0%と答えた人は昨年より減少。
- ◆2030 年に達成度が高いと思う SDGs の目標は、1 位「安全な水とトイレを世界中に」、2 位「貧困をなくそう」、3 位「すべての人に健康と福祉を」。達成度が低いと思う目標は、1 位「貧困をなくそう」、2 位「気候変動に具体的な対策を」、3 位「ジェンダー平等を実現しよう」。貧困に対する評価が二分した。
- ◆環境問題の解決に向けて、高校生世代の 31.3%、Z 世代の 22.9%が「国連などが中心となって世界全体で話し合い、合意して進める」と回答したのに対し、大人世代の 20.0%は「国同士が協力したり、誰かが主導するのは難しい」と回答。
- ◆環境問題が人類によってこれから解決できるかどうか、「解決できる」の回答に、高校生世代は 51.2%、大人世代は 26.6%と約 1.9 倍の差。

※本リリースは環境記者クラブ、環境記者会、重工記者クラブに同時配布しております。

当財団ウェブサイト (<https://www.af-info.or.jp>) でも 8 日 15 時半からご覧いただけます。

■ 本件に関するお問い合わせ先

公益財団法人 旭硝子財団 〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 2 階

顕彰事業部長 伊勢村 次秀 TEL：03-5275-0620 FAX：03-5275-0871 e-mail：post@af-info.or.jp

■調査概要

- ・調査目的 : 日本国内の一般生活者の環境問題に対する意識や行動の実態を把握する
- ・調査対象 : 男女 1,302 名
高校生世代 : 15～18 歳 211 名、Z 世代 : 18～24 歳※ 520 名、大人世代 : 25～69 歳 571 名
※Z 世代は高校生・高専生を除く
- ・調査地域 : 全国
- ・調査方法 : インターネットリサーチ
- ・調査時期 : 2026 年 6 月 24 日(水)～6 月 26 日(金)
- ・有効回答数 : 1,302 サンプル
- ・調査主体 : 公益財団法人 旭硝子財団

※Q1, Q2, Q3, Q4 の設問については、旭硝子財団が実施している世界の環境問題に携わる有識者を対象とした「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」の 2026 年の調査を、一般生活者向けに簡易化して調査した内容です。

※ 各設問における全国平均の結果は、年齢構成を日本の人口構成に合わせて推算したものです。

※「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」は、1992 年から毎年実施しており、旭硝子財団保有データベースに基づき、世界各国の政府・自治体、NGO/NPO、大学・研究機関、企業、マス・メディア、民間等の環境問題に関する有識者に、地球環境に関する現状認識を問うものです。有識者が人類存続に対して抱く危機感を時計の針で表示する「環境危機時計®」を独自に設定し、毎年アンケート調査をしています。

■調査詳細

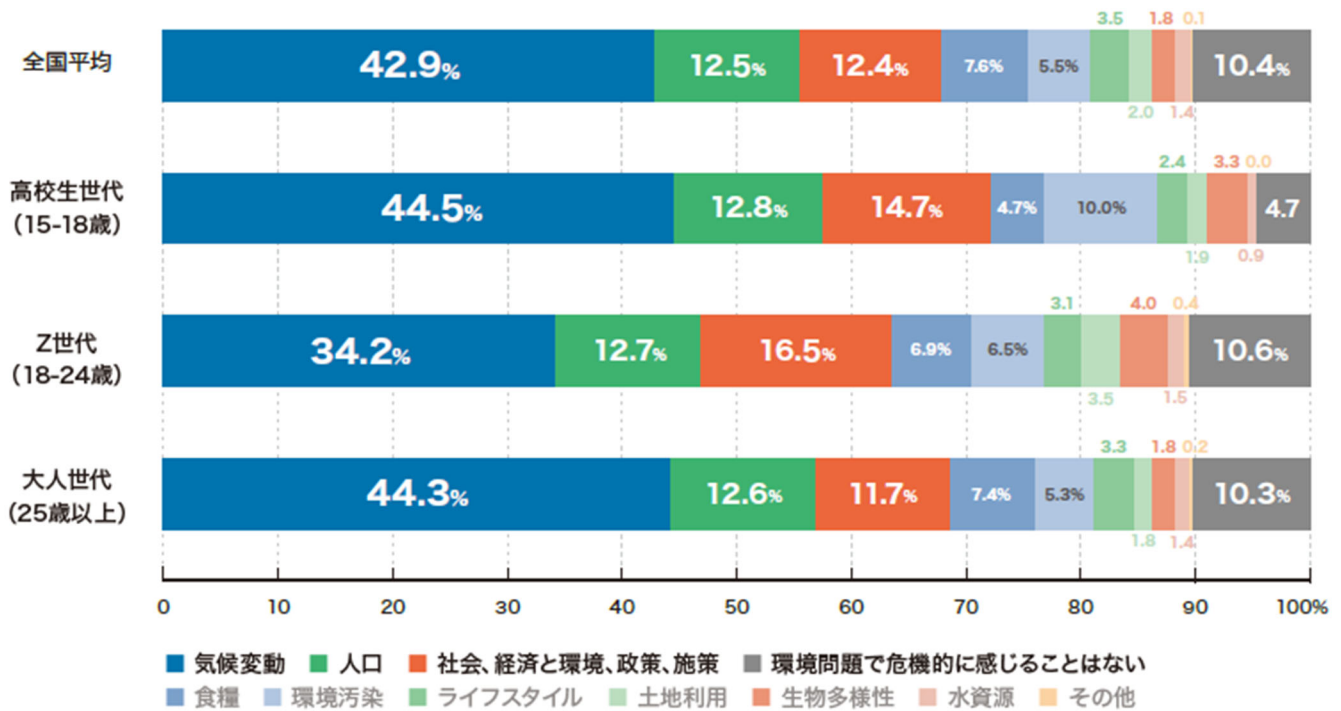
◆国内の環境問題で危機的だと思う項目の 1 位は 7 年連続で「気候変動」。「何十年に一度といわれたものが、毎年起きている」「連続の酷暑は異常」など、各世代から異常気象を身近に感じる回答が寄せられた。

Q1. あなたが日本国内における環境問題を考える上で、危機的な状態にあると考える項目を表から 3 つ選んで、1 位～3 位の順位付けをしてください。

※項目は、有識者を対象とした「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」と同内容のものを使用しています

- ・日本国内における環境問題で、危機的な状態にあると考える項目として最も多かったのは、1 位「気候変動」(42.9%)で、7 年連続で 1 位となりました。その理由として最も多かったのは、夏の異常な暑さや、線状降水帯などを含む豪雨などの異常気象を懸念する回答でした。また、それらによる作物の生育への影響を伴う野菜や米の価格高騰などの不安も昨年に引き続き寄せられています。自由記述では、「連続の酷暑は異常」「年々耐えられない暑さを実感している」といった声のほか、40℃に達する暑さや最高気温の更新、熱中症への懸念を挙げる回答もみられました。また、「温暖化を肌で感じている」「身内が熱中症になることも増え、実感している」など、気候変動の影響を日常生活の中で感じているとの声も寄せられています。
- ・2 位は「人口」(12.5%)、3 位は「社会、経済と環境、政策、施策」(12.4%)の順となりました。昨年に比べ 2 位と 3 位が入れ替わった結果となりました。
- ・「人口」については、出生率・出生数の低下や人口減少、少子高齢化への懸念が多く、「若年層の人口が減っている」「少子化による労働人口の減少による産業の衰退」といった声もありました。「社会、経済と環境、政策、施策」では、物価高や賃金・収入が追いつかないことへの回答が多く、「物価は上がっているが、給料は上がらない」といった声が寄せられています。また、「よく SNS などで見かける」「SNS で人口の減少について話題になっていた」といった回答のほか、ネットニュースや YouTube などへの言及もあり、SNS やインターネットを情報源として挙げる回答もみられました。
- ・一方で、「環境問題で危機的に感じることはない」と回答した割合において、Z 世代が 10.6%、大人世代が 10.3%に対して、高校生世代は 4.7%と他世代より低い結果となりました。高校生世代の自由回答では、学校の授業などで環境問題や社会課題について学んだ経験に触れる回答がみられました。
- ・旭硝子財団が有識者を対象に実施した本年のアンケート調査結果でも、環境問題を考える上で最も多く選ばれた「地球環境の変化を示す項目」は、「気候変動」でした。

日本国内の環境問題で危機的に思う項目



(n=1302)

上位3項目を選んだ主な理由は、以下の通りです。(※回答より一部抜粋)

<気候変動>

- **高校生世代**：「近年5月から10月頃まで暑く、7・8月は異常な暑さが続き危機感を感じるため」
「近年地球温暖化の影響により40℃を観測している地域を見聞きし、このペースで行くと10年後には50℃を観測している深刻な状況になりそう」「学校の授業で気候変動により地球温暖化が進み、それによって海水が上昇したり食料が不足したりすると習ったから」「夏が命の危険があるレベルで暑くなったから」
- **Z世代**：「連日熱中症の注意ニュースや、酷暑日の設定、これまでにないレベルの異常な気象異常をニュースで見て、早めに対策しないと危険であると日常的に感じているため」「身内が熱中症になることも増え、実感している」「猛暑日が続いたこと、春と秋が短く感じたこと、ゲリラ豪雨や豪雪といった極端な気候を感じるが増えたから」
- **大人世代**：「何十年に一度といわれたものが、毎年起きている」「ニュースなどで頻繁に目にすることが多い」「恐怖を感じるような気候が多くなったと感じる」「夏が暑すぎる。自分が生きてきた時間だけで変化が分かるくらいだから将来が心配」「テレビで放送されている情報から、猛暑、台風の強大化、極端な少雨と豪雨、作物の生育可能地域の変化、漁場の変動、熊の出没、いずれも気候変動が大きな要因と考える」

<人口>

- **高校生世代**：「少子高齢化について授業で勉強した経験」「少子高齢化、過疎過密」「学校の授業や、テレビで見るニュースなどで日本の人口減少が激しいということを見るから」「自分が田舎に住んでいて、空き家が増えていて働き手が減っているから」
- **Z世代**：「人口がとにかく減りすぎている。少子高齢化が進んでいて若者の負担がどんどん重くなっているのが気になる」「少子高齢化が年々進んでいることを大学でよく聞くから」「SNSで人口の減少について話題になっていたから」「少子高齢化が進み、子供は増えず年寄りが増え若い世代への負担が増えて子供を産む人が減っているから」
- **大人世代**：「少子化による労働人口の減少による産業の衰退」「少子化や若年層の首都圏集中のニュースを見ると不安になる」「ニュース番組から」

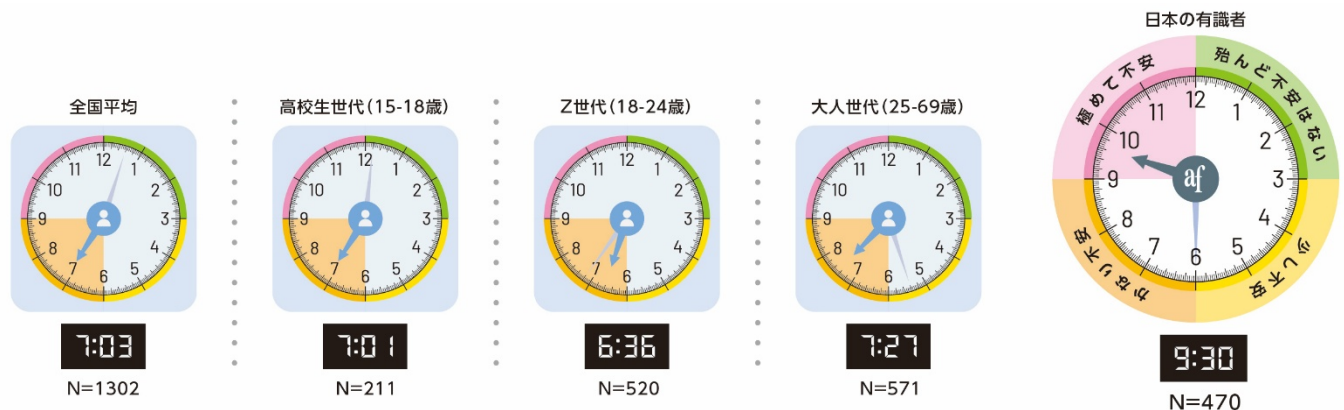
<社会、経済と環境、政策、施策>

- **高校生世代**：「物価高やナフサ問題が今の日本として強く問題視されているから」「学校での勉強や、ニュースなどでよく見る話題だから」「円安や石油不足などのニュースをよく見るから」
- **Z世代**：「税金がどんどん上がって生活が苦しくなる人が多い」「近年の物価高による格差拡大」「自分に最も関係性が高い内容だから」
- **大人世代**：「イラン情勢による会社の経営悪化」「選挙をもっと全員で投票する仕組みにしたらいいと思ったから」「貧困家庭が増えていること、子どもの貧困が増えていること」「物価は上がっているが、給料は上がらないから」「物価高騰で生活が大変」

◆環境危機意識を時刻(0:01~12:00の範囲)で表す環境危機時計は、昨年より約30分戻り「7時3分」と「かなり不安」を示している。世代別では、高校生世代「7時1分」、Z世代「6時36分」、大人世代「7時27分」と大人世代の方が危機意識は高い。日本の有識者の回答「9時30分」の「極めて不安」とは約2時間半の差はあるが、いずれも不安を感じている。

Q2. 以下の図は、環境問題の意識を時計の針にたとえた「環境危機時計」とよばれるものです。以下の図を参照し、あなたの日本国内における環境問題への危機意識を時計の針に例えて0:10 ~ 12:00の範囲で〇〇時〇〇分と答えてください。※時刻は便宜上、10分単位記入。

- ・ 環境問題への危機意識を時刻に例えると、全国平均は「7時3分」となり、「かなり不安」という結果になりました。世代別では、高校生世代「7時1分」、Z世代「6時36分」、大人世代「7時27分」で大人世代の方がより危機を感じている一方で、高校生世代はZ世代より危機意識を持っているとの結果となりました。
- ・ 昨年の同調査では、全国平均で「7時29分」、高校生世代「7時23分」、Z世代「7時4分」、大人世代「7時55分」で、昨年の方が30分程度危機意識がより高い結果となりました。
- ・ 有識者を対象とした本年の日本の環境危機時計の時刻は、「9時30分」で「極めて不安」となっており、一般生活者との意識には、約2時間半の差があることがわかりました。
- ・ 不安を感じる主な理由として、国内外での異常気象についての回答が多く寄せられました。



- ・ その理由は、以下の通りです。（※回答より一部抜粋）

■ **高校生世代**：「環境問題が悪化している今、自分が大人になる頃にはもっと酷くなっているんじゃないかと日に日に感じているため」「毎年どんどん暑くなっていくので、自分が高齢者になる頃には夏はもう出かけられないほどの暑さになってしまうかも」「いま若いから将来が見えない」と思ってしまふ。もっと早く生まれてたら楽だったのに」

■ **Z世代**：「環境問題だけでなく、人口減少や経済の衰退などあらゆる問題が重なり、今後も良くなっていくとは思えないから」「自分がこれから生きていくにあたって、地球温暖化や物価高、税金増額など厳しい状況が待っていると思うから」「人口減少や気候変動に加えて、社会全体のバランスや取り組みにも問題があると考えるため」

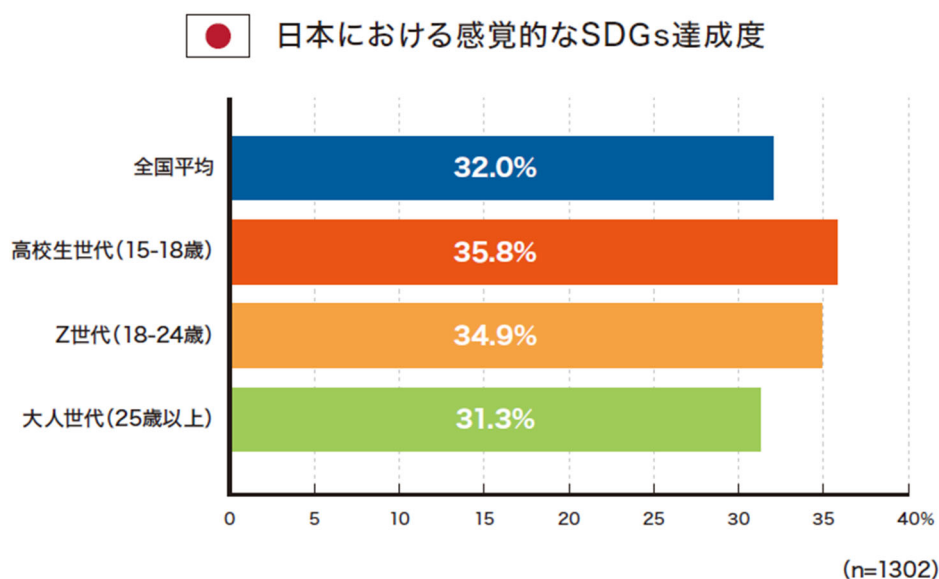
■ **大人世代**：「自分が子供の頃と比べ 30年くらいの間に大きく様変わりしていると思う。変化自体が急激すぎる。『異常気象』というフレーズもはやデフォルト化してきている」「最近の夏の暑さやゲリラ豪雨、豪雪など、大雪など自然災害の被害を聞く機会が増えたから」「子どもの頃に比べると、周りの環境がすごく悪くなっている」

◆日本における現時点の感覚的な SDGs 達成度は、高校生世代 35.8%、Z 世代 34.9%、大人世代 31.3%と、若い世代ほど高く評価されている。0%と答えた人は昨年より減少。

Q3. あなたが日本国内における環境問題を考え 2030 年までの目標に向けて、17 ある SDGs が、全体として現時点でどの程度達成できていると思いますか。日本と世界の状況それぞれにおいて、全目標達成を 100%として、1～100 の数字でお答えください。目標に向かっていると思わない場合は「0」を入力してください。

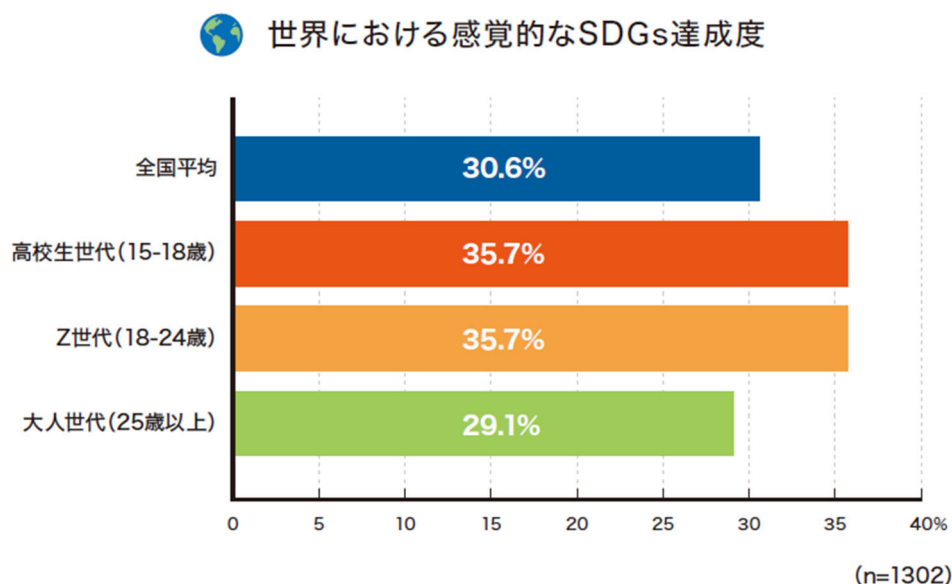
<日本における感覚的な SDGs 達成度>

- ・ 高校生世代は 35.8%で、若い世代ほど SDGs が達成されつつあると評価していることがうかがえます。
- ・ 達成度を 0 と回答したのは全国平均 11.0%（118 名）でした。
- ・ 全国平均は 32.0%で昨年の 25.1%より約 7 ポイント高い結果になりました。



<世界における感覚的な SDGs 達成度>

- ・ 高校生世代、Z 世代はともに 35.7%、大人世代は 29.1%でした。日本国内と同様に、若い世代ほど、世界で SDGs は達成されつつあると評価しているようです。
- ・ 達成度を 0 と回答したのは全国平均 10.8%（120 名）でした。昨年は全国平均 12.1%（157 名）で、微減したことがわかりました。
- ・ 感覚的達成度は、全国平均で日本では 32.0%、世界では 30.6%となっており、日本の方が世界よりもわずかながら SDGs 達成度が高いという感覚であることが分かります。



◆2030年に達成度が高いと思うSDGsの目標は、1位「安全な水とトイレを世界中に」、2位「貧困をなくそう」、3位「すべての人に健康と福祉を」。達成度が低いと思う目標は、1位「貧困をなくそう」、2位「気候変動に具体的な対策を」、3位「ジェンダー平等を実現しよう」。貧困に対する評価が二分した。

Q4. SDGs (Sustainable Development Goals ; 持続可能な開発目標) とは、2015年9月の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。2026年は、SDGsの達成期限である2030年まであと4年となる年です。日本国内において、17あるSDGsの目標の中で2030年に達成度が高い(あるいは低い)と思うものから順に1位～3位まで選んで順位付けをし、目標の番号でお答えください。

※同じくらいの達成度だと考える場合は、より達成が早いと考えられる目標をお答えください。

- ・ 達成度が高いと思う目標は、昨年は1位「貧困をなくそう」、2位「安全な水とトイレを世界中に」、3位「飢餓をゼロに」という結果でした。今年は3位に「すべての人に健康と福祉を」という目標が入り、Z世代で2位の結果です。
- ・ 高校生世代の1位は「質の高い教育をみんなに」で、教育に関する目標が最も高く評価されました。また、昨年4位だった「ジェンダー平等を実現しよう」が今年は2位となり、教育とともに高い評価となりました。
- ・ 世代間でギャップがあった項目は、「いずれも達成度は0に近い」で、Z世代は21.0%、大人世代は28.5%に対して、高校生世代は10.4%が選択しました。ただし、全国平均では27.0%で、4人に1人以上が「いずれも達成度は0に近い」を選択しました。

日本国内において、 17項目あるSDGsの中で2030年に達成度が高いと思うもの

	全国平均	高校生世代 (15-18歳)	Z世代 (18-24歳)	大人世代 (25歳以上)
1位	貧困をなくそう	質の高い教育をみんなに	安全な水とトイレを世界中に	安全な水とトイレを世界中に
2位	安全な水とトイレを世界中に	(同率) 質の高い教育をみんなに	(同率) 安全な水とトイレを世界中に	貧困をなくそう
3位	すべての人に健康と福祉を	貧困をなくそう	すべての人に健康と福祉を	気候変動に具体的な対策を
4位	飢餓をゼロに	安全な水とトイレを世界中に	貧困をなくそう	すべての人に健康と福祉を
5位	質の高い教育をみんなに	すべての人に健康と福祉を	飢餓をゼロに	飢餓をゼロに
6位	気候変動に具体的な対策を	飢餓をゼロに	ジェンダー平等を実現しよう	質の高い教育をみんなに
7位	ジェンダー平等を実現しよう	平和と公正をすべての人に	働きがいも経済成長も	働きがいも経済成長も
8位	働きがいも経済成長も	つくる責任 つかう責任	つくる責任 つかう責任	ジェンダー平等を実現しよう
9位	住み続けられるまちづくりを	気候変動に具体的な対策を	エネルギーをみんなに そしてクリーンに	住み続けられるまちづくりを
10位	つくる責任 つかう責任	人や国の不平等をなくそう	気候変動に具体的な対策を	産業と技術革新の基盤をつくろう

(n=1302)

- ・ 達成度が低いと思う目標は、全体では1位「貧困をなくそう」、2位「気候変動に具体的な対策を」、3位「ジェンダー平等を実現しよう」でした。昨年の全体結果は1位「貧困をなくそう」、同率2位で「働きがいも経済成長も」「気候変動に具体的な対策を」でした。1位は昨年も同様で、引き続き貧困に対する評価が二分しています。また、今年から新たに「ジェンダー平等を実現しよう」が上位に入る結果となりました。
- ・ 全世代「貧困をなくそう」が1位でしたが、2位以下では異なる結果になっています。高校生世代の2位は「ジェンダー平等を実現しよう」、3位は「気候変動に具体的な対策を」でした。Z世代の2位は高校生世代と同様ですが、3位は「働きがいも経済成長も」となりました。大人世代の2位は「気候変動に具体的な対策を」、3位は「エネルギーをみんなに」「ジェンダー平等を実現しよう」の2つが入っています。継続した調査から、「ジェンダー平等を実現しよう」の評価が複数の世代で高まっていることが確認されました。

日本国内において、
17項目あるSDGsの中で2030年に達成度が低いと思うもの

	全国平均	高校生世代 (15-18歳)	Z世代 (18-24歳)	大人世代 (25歳以上)
1位	貧困をなくそう	貧困をなくそう	貧困をなくそう	貧困をなくそう
2位	気候変動に 具体的な対策を	ジェンダー平等を 実現しよう	ジェンダー平等を 実現しよう	気候変動に 具体的な対策を
3位	ジェンダー平等を 実現しよう	気候変動に 具体的な対策を	働きがいも 経済成長も	ジェンダー平等を 実現しよう
4位	気候変動に 具体的な対策を	働きがいも 経済成長も	気候変動に 具体的な対策を	ジェンダー平等を 実現しよう
5位	すべての人に健康と福祉を	気候変動に 具体的な対策を	気候変動に 具体的な対策を	気候変動に 具体的な対策を
6位	エネルギーをみんなに そしてクリーンに	つくる責任 つかう責任	すべての人に健康と福祉を	すべての人に健康と福祉を
7位	人や国の不平等をなくそう	海の豊かさを守ろう	人や国の不平等をなくそう	人や国の平等をなくそう
8位	働きがいも経済成長も	人や国の不平等をなくそう	質の高い教育をみんなに	働きがいも経済成長も
9位	平和と公正をすべての人に	陸の豊かさを守ろう	安全な水とトイレを世界中に	平和と公正をすべての人に
10位	安全な水とトイレを世界中に	平和と公正をすべての人に	陸の豊かさを守ろう	質の高い教育をみんなに

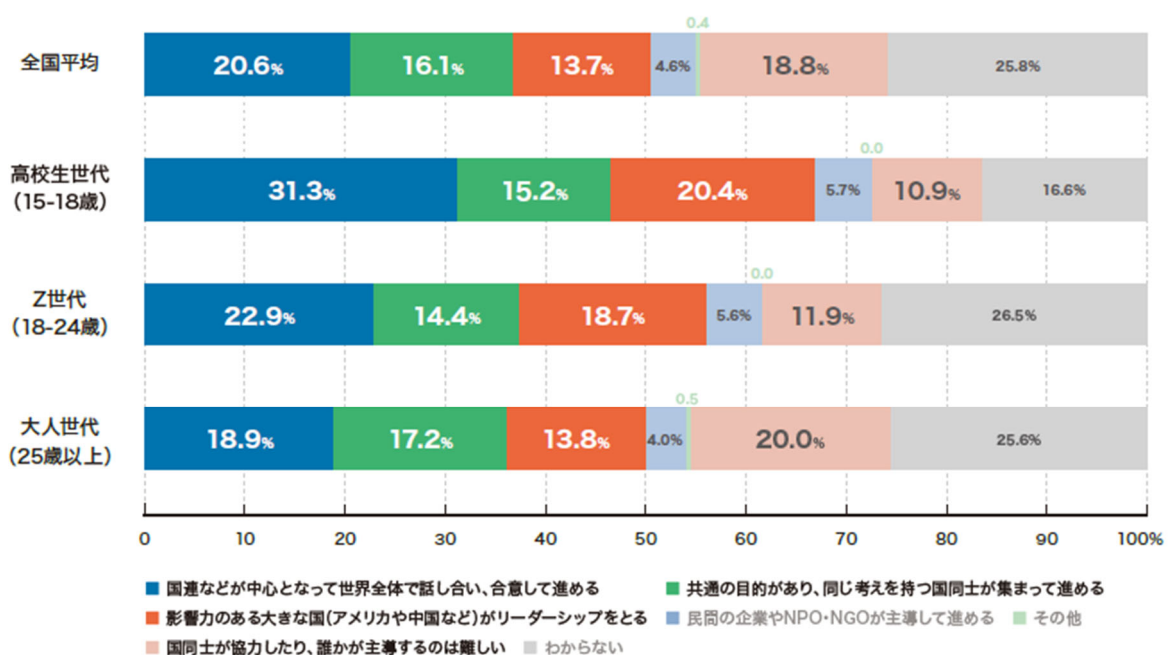
(n=1302)

◆環境問題の解決に向けて、高校生世代の 31.3%、Z 世代の 22.9%が「国連などが中心となって世界全体で話し合い、合意して進める」と回答したのに対し、大人世代の 20.0%は「国同士が協力したり、誰かが主導するのは難しい」と回答。

Q5. これから先、環境問題の解決に向けてどのような枠組み（主体や仕組み）が中心になっていくと思いますか。あなたのイメージに最も近いものを選んでください。

- 「国連などが中心となって世界全体で話し合い、合意して進める」は高校生世代 31.3%、Z 世代 22.9%といずれも1位という結果になりました。対して、大人世代の1位は20.0%で「国同士が協力したり、誰かが主導するのは難しい」となりました。
- 高校生世代、Z 世代の2位はいずれも「影響力のある大きな国(アメリカや中国など)がリーダーシップをとる」となりました。大人世代の2位は「国連などが中心となって世界全体で話し合い、合意して進める」となり、世代間でのギャップが見られる結果となりました。

これから先、環境問題の解決に向けて
どのような枠組み(主体や仕組み)が中心になっていくと思うか



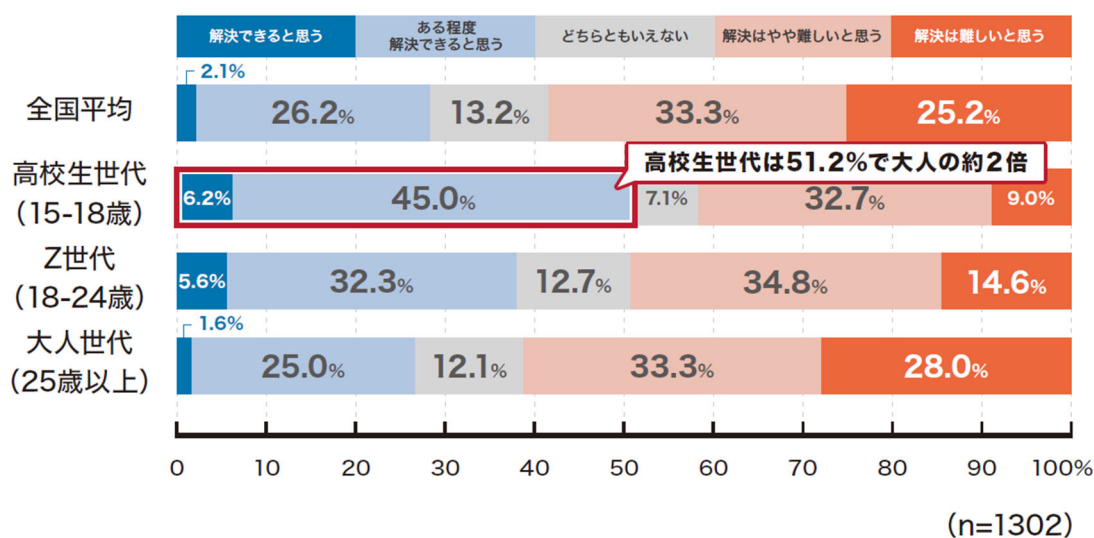
(n=1302)

◆環境問題がこれからの人類によって解決できるかどうか、「解決できる」の回答に、高校生世代は 51.2%、大人世代は 26.6%と約 1.9 倍の差。

Q6. 環境問題は、これからの人類の努力によって解決できると思いますか。あなたの考えに最も近いものを1つ選んでください。

- ・ 高校生世代では「ある程度解決できると思う」が 45.0%、「解決は難しいと思う」が 9.0%に対し、大人世代は「ある程度解決できると思う」が 25.0%、「解決は難しいと思う」が 28.0%と世代間のギャップが大きいことがわかりました。
- ・ 「解決できると思う」「ある程度解決できると思う」を合わせると、高校生世代は 51.2%、大人世代は 26.6%と約 1.9 倍の差がありました。一方、「解決は難しいと思う」「解決はやや難しいと思う」を合わせると、高校生世代は 41.7%、大人世代は 61.3%と約 1.5 倍の差がありました。
- ・ 全国平均では、「解決はやや難しいと思う」「解決は難しいと思う」を合わせて 58.5%となりました。

環境問題は、これからの人類の努力によって解決できると思うか



■本調査に関する監修者の見解

本年の調査結果は、とりわけ環境「危機」意識が高まっていることを示すものでした。特に、回答のなかに「何十年に一度といわれたものが、毎年起きている」というものや、「連続の酷暑は異常」というものが含まれていることは特筆しておくべきだと思います。気候変動の影響が、いよいよ肌身に感じて危機的だと認識していることは様々なコメントなどにも表れてきています。まだ先のことだとおもっていた気候危機がいよいよ身近になってしまっていることがよく表れています。特に、夏の暑さの異常さが目立つようになってきたところにもものごころがついてきた高校生やZ世代においてさえ、昨今の暑さが異常だと感じているということは、急速な変化を表しているともいえるでしょう。

この異常さを認識し、大きな政策の変革が求められるところです。

ところがその反面、政治的な動向が遅々として進んでいないこと、そしてそのことに対していわばあきらめのような見方があることに、大きなギャップを感じざるを得ません。特に大人世代において、国同士の協力やリーダーシップへの期待が少ないことが、このことを端的に表しています。環境問題を解決できるとみる大人世代の割合が低いことも、その表れと言えるでしょう。

科学の指摘をよそに、石油を大量に消費することに気後れさえしないような昨今の政治情勢に対して、もはやあきらめのような見方が広がることには、強い危機感を感じます。

このような現状に対して、希望はないのでしょうか。

今回の調査の中で希望の光となるのは、若者世代の回答だとみます。例えば、課題解決に向けて「国連などが中心となって世界全体で話し合い、合意して進める」との回答を見ると、高校生やZ世代の回答が大人世代を上回っています。特に高校生世代ではその割合が大人世代の1.5倍となっています。あるいは、環境問題を人類が解決することへの期待は、高校生世代では大人世代の2倍近くに上っています。

これからを生き、課題解決を担う若者世代が希望を捨てていないことは、そのこと自体が希望の光となっていると言えます。これからの時代を生きる若者たちへの負担を少なくすることに、大人が自覚し、変革を起こす時なのではないでしょうか。

<監修者プロフィール>

蟹江 憲史 (かにえ のりちか)

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

慶應義塾大学 SFC 研究所 xSDG・ラボ代表。
同大学グローバルリサーチ・インスティテュート (KGRI) Keio STAR
共同センター長。

北九州市立大学助教授、東京工業大学大学院准教授を経て現職。
日本政府持続可能な開発目標 (SDGs) 推進円卓会議構成員、内閣府
自治体 SDGs 推進評価・調査検討会委員他、再生可能エネルギー会社で
ある株式会社レノバ独立社外取締役役に 2017 年から 4 年間就任。

専門は国際関係論、サステナビリティ学、地球システム・ガバナンス。
国連における SDGs 策定に、構想段階から参画。SDGs 研究の第一人者で
あり、研究と実践の両立を図っている。

近著に「SDGs (Sustainable Development Goals) 中公新書、2020」がある。
独立科学者 15 人のメンバーとして国連事務総長に選任され、国連 Global Sustainable Development
Report (GSDR) の 2023 年版執筆を行った。博士 (政策・メディア)。

